

銀杏

発行所

〒792-0835
新居浜市山根町8番1号
曹洞宗瑞應寺専門僧堂
編集発行人 村上 徳 存
電話(0897)41-6563
FAX(0897)40-3127

毎月1日発行
(振替 01330-2-31918)
瑞應寺
印刷所 東田印刷株式会社

碧巖録物語独語〔十〕

後堂 門 原 信 典

方回の序①「腹に一物、背に荷物」
圓悟禪師の弟子である大慧宋杲
禪師という方がいました。天才肌
の禪師で、雲水の指導をしている
と、一門の修行者達が「碧巖録」を
抛り所にしてその言葉尻だけ捕ら
えてわかつた気になっている。

こういう本があると修行をしな
くなる。言葉ばかり覚えて弄ぶ。
(これは私自身の事ですわね。)

禪師はその事を憂えて、版木や
刊行されたものを可能な限り集め
て焼き捨てたそうです。その事が
再版された碧巖録の三人の序文
「方回の序」「周馳の序」「三教老人
の序」に示されています。

まず「方回の序」
「四十二章経」中国に入りてより、
始めて佛有るを知る」

四十二章経は、インドから中国
に伝来した最初の翻訳經典とされ
お釈迦様の説かれたお示しを四十

「本来無一物」といふを南宗と為
し、「時に勤めて拭拭せよ」とい
うを北宗と為す。

中国の禪宗は、初祖達磨大師か
ら、二祖慧可大師・三祖僧璨禪師・
四祖道信禪師・五祖弘忍禪師に至
り、その弟子に大鑑慧能禪師と玉
泉神秀禪師がいました。神秀禪師
は北宗禪、慧能禪師は南宗禪とに
分かれます。南宗禪は唐の中頃か
ら大いに発展し、慧能禪師の下に
は、南嶽懷讓禪師と青原行思禪師
の系統が出て湧仰宗・臨済宗・曹
洞宗・雲門宗・法眼宗の五家、そ
して臨済宗に黄竜派と楊岐派が生
まれ七宗となります。

「本来無一物」は慧能禪師のお示
しで、坐禅の事、佛道修行の事
です。どういふことでしょうか。

修行道場でお経を読む時に「お
経は耳で読め」と教えられます。

自分勝手にお経を読まない。先
ず周りの人のお経を耳で聞いて、
それに合わせて声を出す。これは
お互いの生活にも言える事です
が、実はなかなか難しいのです。

お檀家さんとお経を読む時にも
そう説明しますが、皆さん聞くこ
とに心が向いて自分の声が出ませ
ん。中には反対に独特の節回しで
一人悦に入っている人も居ます。そ
して、目でお経の字を見て、鼻で息
を吸って口で声を出します。もち
ろん声を出すときには息を吐きま
す。お経をきちんと読もうとする

と呼吸も調えなければいけません。
呼吸を調えるには身体を調えなけ
ればなりません。ですから身体と
息と心が調ってお経と一つ、全体
と一つになれるのです。そこには
お互いの個人的な思惑は入りよう
がないのです。人と人だけではな
く環境も含めて全体と一つの姿が
無一物と云ふ本来のあり方です。そ
れは修行生活全てに言える事です。

「腹に一物、背に荷物」人間はい
つも自分の思惑に振り回されて、
何かを期待しないと生きていけな
いのです。しかしそれは佛道では
ありません。

「時に勤めて拭拭せよ」これは
神秀禪師の言葉です。

一般的な修行観です。自分はいつ
も煩惱にまみれているから、塵や垢
を払うように勤めなければいけない。
やりがいがある、わかりやすい
大事な教えですが、私たちの坐禅
は塵や埃を相手にして、結果を求
める方法や手段ではありません。

「二寸坐れば一寸の佛」と表現さ
れるように、佛様の姿です。

「本来無一物」「時に勤めて拭
拭せよ」この二つのお示しは改め
て読ませていただきます。

【是に於て、禪宗の頌古世に行わ
る有り】

頌は偈頌のこと、偈はもとも
とサンスクリット語の音訳で、偈
陀或いは伽陀といひます。

佛典を十二に分類する十二分教

があり、その一つに釈尊が詩文の
形で佛法を説かれる偈があります。
古代インドでは、バラモン教ヒン
ズー教等の開創者や聖人達が、その
教えを一定のリズムを持った韻文の
形で説かれます。それは何故か？
文字や記録道具の無かった古代
人の間では、尊敬すべき教祖や聖
人の教えを暗記しながら広めた
り、子孫達に伝えなければならな
かったのです。

一つの文章を暗記する。或いは
伝える場合には、その文体に一定
のリズムを持たせる事が自然に生
まれてきたのです。

日本人の俳句や短歌の七・五の
リズムもどうして生まれてきたの
でしょう。七と五は聖なる数字。ま
た、五十七で十二文字が一呼吸で読
むのに最適な長さともいわれます。

実は、二音を基礎にした四拍子
だったのです。日本語は同じリズ
ム、一字一音の言語、これを機関
銃リズムと云います。

生活の基本は歩く事です。から、
歩くリズムから生まれたのでしょ
うか。体操も1・2・3・4で一
区切り。2・2・3・4で一
区切り。イチ・ニー・サン・シー・と
二音ずつ数えます。これは八拍子
を基本にした四拍子です。

梅花流の御和讃も歌詞は七・五
調ですが、休止符を入れて四拍子
となります。調べてみれば面白い
ですね。(続く)

テレホン法話 〇八九七 四一・〇〇三三

禪のたより

◆視野を
広げてみましょう

拙寺の境内には、師匠である父が牡丹を植えています。毎年四月頃、満開になるのですが、去年ぐらいいから花の咲きが悪くなりました。三十年程たっているので寿命なのか、気候のせいなのかは分かりませんが、私たちではどうにもならず、庭師の方に牡丹の植え替えと庭の整備をお願い致しました。

工事が始まり庭の良さもわからない私でも、綺麗に整備されているなど、思うようになった頃、松山のお寺さんが所要でお越しになりました。

工事中の庭を見て「牡丹の植え替えですか？花にも木にも寿命があるからね」と話

します。私は「師匠がこだわったみたいで以前から石庭として整備したかったみたいですよ」と言うと「隆弘さん。お師匠さんは、単にお寺の庭の整備ではなく、自己表現として庭を整備したかったのだと思うよ。姿勢を正してよくこの景色を見てごらん。この本堂から見える風景は素晴らしいね。この庭の樹木や石も味があるけど、あの奥の神社の緑、山の緑、空の青とのコントラストが素晴らしい。お師匠さんの僧侶としての生き方がよく表れているのではないだろうか？街中のお寺には街中の良さがあるけど、自然が多いお寺には自然の良さがある。なんだけ気持ちがいい」と。

私はあらためて姿勢を直し

呼吸を調べて、本堂から庭を見渡してみました。先ずは、石は石、樹木は樹木それぞれによさや美しさに目を向けます。次に視野を広げ全体を眺めて見ると、周りの景色によつて石も樹木も、すべてのものが繋がって、それぞれの美しさが発揮されています。そうやってしばらく景色を眺めていたら、いつの間にか自分もそんな景色の一部になつてしまったようなとても穏やかな気持ちになりました。

日々の暮らしの中では、身近なことばかりに気をとれがちになります。多くの物ごとや情報に振り回され、なかなか自分の心に目を向けることができなくなることもあります。

お釈迦さまはそんな私たちに智慧をもつて生きることを示されています。智慧とは道理を見きわめ、物事を正しくとらえる力です。自然や社会の繋がりの中で生かされているということを気づく力で。私たちは決して独りで生きていくわけではありませ

ん。お互いが支えたり、支えられたり、支え合つて生きていくのです。わずかな時間でも結構です。呼吸を整え静かに過ごすひと時を持たれてはいかがでしょうか。角度を変えたり、立場を変えたり、遠くを見たり、近くを見たり、静かな気持ちで物事をとらえることで自分と向かい合え、今までと違う風景に気づくことが出来るはずです。

愛媛県晴光院 曾根隆弘師

令和四年九月十一日〜二十日

◆同事といふは
不違なり

私が二十代前半。北海道のお寺でお世話になっていた時のお話です。春の遅い北海道で、桜の花が満開になった5月頃のことでした。ある檀家さんのお家へ、お子さんの七回忌のご法事に伺ったときのことです。

そのお家には、毎月一回、お参りに行っていましたので、十代後半の息子さんが交

通事故で亡くなったことは知っていました。また、その檀家さんも私が愛媛県からお坊さんとしての勉強をしにきていることや、一人暮らしであることも知っておられましたので「ご飯食べてる？困ったことはない？」と、よく声をかけて頂きました。

七回忌の当日、読経を済ませ、お話をしようと思ひ振り返ると、ご両親は合掌した手をおろすことなく、息子さんの位牌を見たまま、涙を流していました。七回忌を迎えてもお、心から愛する子供を失った悲しみにくれる姿がそこにありました。その姿を目の当たりにしたとき、人の世の無常や、命の尊さ、子供を亡くすという悲しみがどういふことか、様々なことが一瞬のうちに頭の中を駆け巡り、私は言葉を失ってしまいました。

そんな私の姿を見て、お父さんは「うちの息子が交通事故で亡くなった時から、毎日、仏壇の前で手を合わ

せています。七回忌を迎える今でも、事故のことや、子供のことばかりを考えてしまいます。それと同時に、他所の親御さんには、自分たちのような悲しみにくれてほしくない。子どもさんには事故を起こさぬように、事故にあわないようにと、何度何度でも注意をしてほしいという願いもあります。隆弘さん、どうか、この悲しみと願いが分かるお寺さんになって下さい」と話されました。

自分の気持ちを分かってくれる人がいるということ、は、本当に心強く安心できるものです。インターネットが急速に普及したせいなのか、長く続く経済活動の停滞のせいなのか、近年とみに人間関係の希薄化が進んでいるように思われてなりません。今こそ、誰かに寄り添うことのできる仏道の実践が求められています。道元禅師さまは修証義の中で「同事といふは不違なり」とお示しになられました。

た。「不違」とは「ちがわない」ということ。他人を思いやる気持ち、相手と同じ気持ちになるということです。自分のことだけを考えるのではなく、相手の立場になり、思いやりのある行動をとること。嬉しいときは共に喜び、悲しいときは共に悲しむ、同事とは相手に寄り添い、共に歩もうとする姿勢であります。

私は、『同事』という言葉を見るたびに今でも、「悲しみと願いが分かるお寺さんになって下さい」という、あときのお父さんの言葉を思い出します。

どんな人でも、苦しみや悲しみから逃れることは出来ません。代わってあげることも出来ません。しかし、その苦しみや、悲しみを、分かろうと思ひ、寄り添うことは出来ます。相手を理解しようと思ひ掛け、相手の立場になろうと努力することが出来ます。そういった思いやりの心、思いやりの日送りをするからこそが、

同事という道元禅師のお示しに合うものではないでしょうか。

愛媛県晴光院 曾根隆弘師
令和四年九月二十一日〜三十日

◆南無地獄大菩薩

去る七月二十五日ご遷化されました瑞應寺三十世檀崎通元老師のお話をさせていただきます。私は四十年前、「いつでもどこでもだれでもそこから始めるしかないんじゃ」とお示しいただきました。それは今でも私の修行の励みになっています。

そして、二十年前の一光老師の七回忌に合わせて報恩のお授戒会がございました。その最後の日に完成上堂という、戒師として須弥壇に上られての問答がありました。長い時間の中で私の記憶も怪しいのですが、授戒に付かれていた尼僧さんが「現代社会では地獄行きの人ばかり、如何にして救えばよいか」というような問いだったと思いま

すが、老師様間髪入れず「先に地獄に行つて待つ」とお答えになられました。

まさに南無地獄大菩薩。地獄から救うのではない、地獄こそ私の道場だ。地獄を亡者と共に勤めるのだ。とお答えになられたのか。

御幼少のころから病弱で「この子は長生きしないだろう」と云われ、二月二十七日のお生まれの事もあり、周りからは「小学校の入学も一年遅らせようか」と話があつたそうですが、お師匠様の孝如老師が「いや当たり前にしないといかん」と言われたそうです。

晩年は「すべては因縁所生、全てをいただくのみ。有り難いことじゃ」と語られていました。

私共には想像もできぬ、ご苦勞やご心配もおありだったと思いますが、それさえも当たり前の風景、因縁所生としていただかれたお姿が「そこから出発するしかないんじゃ」と重なります。

地獄へ行くか極楽へ行くか。それさえも因縁所生、閻魔様にお任せ。

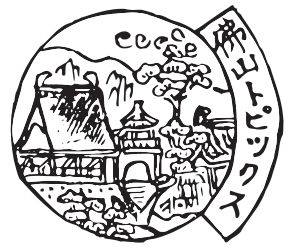
禅僧たるもの、これで良し、これで完成ということは無いのです。常に百尺竿頭進一步。生也全機現、死也全機現。生きている時も天地いっぱいのお佛様の御命の現れ。死もまた御佛様の御命の現れと私達に示され、安然たるご尊顔のまま旅立たれました。言葉が見つかりません。

このご縁を大切にしてお互いに報恩のご供養をつとめてまいりたいと存じます。

瑞應寺専門僧堂 後堂 門原信典
令和四年十月一日〜十日



本葬準備風景



■ 寶篋印塔供養

九月廿三日(金)、村上山主以下山内大衆合山にて、瑞應寺西墓地の永代供養塔「寶篋印塔」の供養法要が厳修された。当日雨天の為、瑞應寺法堂にて行われた。



寶篋印塔

■ 両祖忌

九月二十九日(木)、高祖道元禪師、太祖瑩山禪師の御征忌にあたる。前晩の特為献湯を楠本直録導師のもと厳修。当日に献粥諷經、正当献供諷經

を門原後堂導師のもと如常に修行された。



両祖忌

■ 中国人殉難者慰霊祭

十月一日(土)、瑞應寺墓地内の慰霊碑前にて、中国人殉難者慰霊祭が越海講師導師のもと厳修された。当日は晴天に恵まれ、参列者共々供養を行った。

■ 住友供養

十月七日(金)毎年恒例の住友供養として、別子銅山殉職者並びに、新居浜住友連係会社殉職者の追悼法要が開催された。村上山主、慶正寺様、真光寺様の三導師、合山清衆随喜にて施食供養、系列十一社代表による焼香、回向中の読立供養にて殉職者諸精霊の大法要が厳修された。



住友供養



読立

■ 十月の日鑑

一日 祝祷
中国人殉職者慰霊祭
二日 日曜参禅会
七日 住友供養
十五日 祝祷・略布薩
十八日 観音講・勉強会
廿一日 略布薩
当山三十世大夜

■ 十一月の予定

一日 祝祷
当山三十世本葬
三日 金毘羅秋大祭
四日 達磨忌速夜
五日 達磨忌正當
六日 日曜参禅会
八日 参玄会(十日迄)
十四日 配役行茶・入寺式
土地堂念誦庫司点湯
十五日 祝祷・小参・人事行礼
略布薩
十八日 観音講・勉強会
廿一日 太祖降誕会
廿日 略布薩

■ 銀杏感謝録

岡山県 名越礼祥 殿
愛媛県 梶原恵都子 殿
長崎県 宝泉寺 殿
鳥取県 聖福寺 殿
北海道 田崎正倫 殿
宮崎県 願成寺 殿
愛媛県 宮崎芳久 殿
静岡県 洞慶院 殿
東京都 志々目一郎 殿

(令和四年八月十七日受付迄)



鐘 声

「佛道は人々の脚跟下なり」この言葉は永平初祖学道用心集に出てくる言葉で、通元老師が朝参の際によくお話しされた言葉です。

佛道はどこか特別な処にあるのではなく、私達の足下にある、私達の歩む道が佛道である。という教えでしょうか。

通元老師の真意はわかりませんが、この言葉を聞く度に通元老師のことを思い出します。通元老師から教わったご縁を含め、様々な方のご縁を頂いて現在の自分があるというのを忘れず、今日までのご縁、そしてこれからのご縁を大切に修行に精進しようと思います。

副堂 慧岳

